

「広州駅頭に日は暮れて——「双向認識策略」広州、南山大学—国際跨文化研究会第四届学術討論会参加顛末 一九九一年二月二十八日～三月六日」  
『ARGO』14（アルゴ14号）東京大学教養学部教養学科フランス分科アルゴ編集委員会 1992年4月30日 47-50頁

# 広州駅頭に日は暮れて

「双向認識策略」広州、中山大学

—国際跨文化研究会第四届学術討論会参加顛末

一九九一年二月二十八日～三月六日

第二十八回生

稲賀繁美

入学試験中というのに臆目もなく出張伺いを出し、一週間で教授会承認に漕ぎ着け、ヴィザ取得を試みれば旧正月で領事館は休暇中、旅券はとなれば春の旅行シーズンは湾岸危機で中国に旅客が殺到。ほとんど綱渡りのような調子で奔走し、なんとかすべてのハードルを超低空でひっかけながらクリアして、伊丹を飛び立ったのが二月二十七日朝。天安門事件のあたりを食らって、予定よりも二年ほど遅延したが、ようやく広東省の首都広州の中山大学において開催されることになった「双向認識策略」への慌ただしい旅立ちである。中国と西欧との文化交流と相互認識の可能性を歴史的、哲学的に討議する会議で、参加者は内外併せて五〇名ほど。規模は小粒ながら、真

塾な討論の場として「天安門以降」のひとつのモデル・ケースといえる。だがそのご報告はともかく「学会」にたどり着くまでが大変だった。欧米ではともすれば宴会つき学藝会といった雰囲気になる国際学会だが、それがいかに絵空事でしかないかを痛感させられたのが今回の旅行の収穫だった。以下自嘲を兼ねて我が失態をご披露する。

旅行カバンひとつの荷物には、留学生の皆さんのご助力でできた虎の子の中文要約が入っている。事情次第ではこれを全文代読せねばならないので、躍起になって丸暗記にとりかかる。だが飛行機はわずか三時間で、昼過ぎの靄に煙る香港、啓徳空港に到着する。気候は早くも梅雨明けを待つ初夏同然。まったく普通話の通用しない広東語の世界だ。初めての土地とて、右も左もわからぬままに、レートの悪いことで有名な空港出先の銀行で当座の換金をし、帰りの飛行機のリコンファームをまんまと忘れたまま(後始末が大変でした)、ガラガラ空港リムジン・巴士(バス)に飛び乗り、あてずっぽに途中下車、目測どおり九龍駅近くだったのはよかったが、国際列車発着場を探してあちこちと迷った末、なんとか窓口にたどり着く。中華人民共和国側の窓口だけが冷房中で冷快なのも妙だ。当日券取得が可能かどうか不明だった

口に殺到する群衆ともみくちやとなり、人々を腕力や警棒(?)でぶちのめしながら制止する駅員も入り乱れる。すさまじい喧嘩が耳を聳するなかで、自分の意志とは無関係な方向におしくら饅頭よろしく振り回され、あらぬかたにさ迷うが、そもそも、どちらに行ったら良いものやら、表示も無ければ、言葉も通じず、皆目検討がつかない。

大混乱の広場の雑踏。湿った悪い熱気のなかで体は汗と埃にまみれ、二〇分あまりも右往左往した場げ句、トコテン式に環市中路に押し出される。高架のついた、幅五〇メートル以上もあるかと思える六車線(?)の幹線だが、これが夕刻の引け時で、自行車の大洪水。タクシーや超満員鈴なりのバスがクラクションを鳴らさなければなしで、その間を掻き分けて突進する。家路へと足早に急ぐ無数の人々の群れが、どう見ても横断不可能な車道を巧みにかつ強引に横切り、長蛇の列をなして歩道を伝ってゆく。そんな中を、駅の北東こそ目標の中山大学なりと勝手に信じて(実はまったくあらぬかたを指し)、大荷物を背に足を棒にして二時間近く歩き回った末、ついに大学発見に挫折する。途中で道を尋ねたオジサンは、しばらくそんな大学この地上に存在したかしら、といった

が、幸に(?)して空席があり、そのまま即飛び乗って国境通過、三時間あまりの旅ののち、夕刻五時すこし前には、なんら支障なく、もう中華人民共和国広東省の首都、広州の駅頭に降り立った、つもりだったのだが……。

予想はしていたが、ここで完全にわけがわからなくなった。まず駅構内に両替所がない。金がなくてはタクシーも拾えなければ、(到着したらかけろ、と言われていた)電話ひとつかけられぬ(そもそも電話器など見当たらぬ)。きよろきよろしているうちに税関などを大混乱のまま通り過ぎ、駅前に出してしまうが、前に広がる公称二万人収容という広大な駅前広場は、見れば群衆で真っ黒に埋め尽くされている(あとで聞けば旧正月あけに経済特区を指す出稼ぎ労働者の「盲流」とのこと)。右手遙か後ろに白亜のばかでかい姿を見せた建物に広州火車站とある。あれ、と訝しがって振り返ると、今出て来たはずの国際線の到着駅は、看板ひとつなく、まるでバラック同然で中古の工場といったたすまい。「チェンジ・マネー」(という英語は終に聞かずじまい)の子供たちの手を振りほどきつつ(闇はつかまると大変だとか仄聞し)、両替目当てで本来の駅舎を目指す、構内には切符を持っていないければ入構できない。大きな荷物を肩に、我勝ちに入り

風情のあと、ややあって、「そんな荷物しょって歩いてたどりに着くのは無理だよ」。やむなく踵を返して駅の南西に向かい、銀行やら切符売り場やらを求めてむなしく繁華街を彷徨し、そのあげく振り出しに戻ったころには宵闇が迫っていた。ふと見上げれば周囲には竹で足場を組んだ建築中の超高層ビルが林立し、遠く西空には、太陽が、赤銅のつぶれた鍋と化して沈んで行く……。

というわけで、この日は夕焼けを呆然と眺めているまま、ついに目的地の中山大学には到着しなかったのである。中国旅行のイロハを知らなかったわけだ。本来ならまず目指すべきは、どれでもいい視界に入った超豪華大酒店のできるだけ威圧感のあるやつ。そうした巨大建築の一階には必ず電話から郵便局、銀行からデパートさらには火車切符予約受付窓口までがすべて揃っている。外貨を担保に外国人の特権を発揮し、二重経済のからくりを橋渡ししなくては、ほとんど身動きひとつ満足にはできないのがこの国の掟なのである。

だが島国の田舎者はそんなことはつゆ知らず。何のことはない、そのあまりの威風に圧倒され、遠巻きにして敬遠していた、駅前の大ホテル「流花賓館」にくたくたで漂着という体たらく。日本円なら一泊五千円もしな

いが、中国の同僚たちにとっては一ヶ月の給料より高額な宿で貴重な外貨を投下する羽目となる。だがこれも中国の経済を援助するための隣国人の崇高なる義務。一夜ばかりの王侯貴族を気取らせていただいた。豪華な浴室でひと風呂浴び、温風漂う南国の大都会の宵闇へとさ迷いでるその魅惑。翌日の午後ようやくたどり着いた中山大学の、辺りの喧噪とは無縁な典雅なたたづまい。そして豪勢だが虚飾なき客人歓待の伝統の圧倒的な重み。百聞は一見にしかずの広州経済事情、広東台所事情、などなど。珠江流域の無数の運河を縫って展開される広大な大陸の風物に興味は尽きないが、紙面はもうあっけなく尽きている。